日本放射線技術学会スタンフォードセミナーに参加して

聖隷浜松病院放射線部
杉村正義

１．期待していたこととその結果

今回この研修に参加するにあたってアメリカではどうのように研究のテーマを設定しているのかというところを見れたらというふうに考えていた。講義や施設の見学をするなかで、そのような部分をみることはできなかったように思う。しかしスタンフォード大学で行われていることは実際の臨床からかけ離れたものではなく、例えば３D の技術では診断の支援をするためにどんな情報が役立つかという視点で研究が行われているように感じた。考えてみれば、これは日本でも同じことでテーマを設定するには特別なことを考える必要はなく、『どんな情報があると便利か』というごく当たり前のことでよいというふうに思われた。そういった意味では自分の目的に沿った研修が行えたように思え、自分にとっては収穫があった研修となった。

２．技師が見た日本とアメリカの違いをどう感じたか

診療に対する請求の面でアメリカは技術に対し評価を与え対価としての報酬が確実に行われているように思われた。ただそれが正当な額かどうかは別の話になると思うが。アメリカでは一検査あたりの請求額も大きく、日本においては少ない man power で医療がおこなわれ、医療提供側の善意というか一人一人の負担が大きくあると思われ、それにより医療費が抑えられているというふうに感じた。

アメリカでは業務が完全に分業化されていて、３D の作成は画像の取得者とは全く別の者が行っていた。そして CT、MRI の検査に関して技師はとりあえず決められたプロトコール通り scan を行い追加撮像などはほとんど行わないようだった。日本ではこのあたりがもっとあいまいになっている。効率性を考えた時にはアメリカの方法が良いのだろうが、仕事の面白みや他部門との有機的なつながりは日本の方があるように思われ、うまく両方の良いところを採って業務を行えるようにすると良いのではと思われた。

資格の部分ではアメリカでは US、CT、MRI などの専門資格があり、それがないと他のモダリティの操作ができないようだった。これについては、日本においても資格制度が導入されてきているが、今現在一つの資格であらゆるモダリティを操作可能で、限られた人的資源で業務を行なうためには、今のままの方が良いと思われた。ただ質の保証のためには資格制度も必要なのだろうと思われた。

３．もっとも印象に残ったこと。

病院の見学は興味深かった。やはり同じ職種であるアメリカの技師がどんな仕事をしているかというのは気になるところだった。講義では advances in neuroimaging での超高磁場 MRI の DTI や flow image の画像など興味深かった。Moleculer image もはじめて聞く話だったので面白かった。一番印象に残った言葉は Glazer 教授が引用していた『絵を見ると千の言葉にも匹敵する、だから画像は強力なのだ』という言葉だった。自分もそんな画像に携わる仕事ができて良かったと思えた。

毎日の夜の meeting も印象的というか刺激や励みになった。日本の技師でも優れた人がこんなにもいたのかということを感じた。あと親睦の意味でも非常に重要な時間となった。

４．今後の海外研修のあり方について

とてもすばらしいカリキュラムと講師の方たち、GE の方たちの多大なサポート等によりとても快適に充実した研修を送れたと思う。ただ病院やルーカスセンターでの実習というか現場について研修が行えるともっとよかったかと思う。ただその時には人数を半分ぐらいにする必要があるかとも思う。英語ができない自分にとって同時通訳は大変ありがたかった。しかし英語ができるともっともっと充実したものになると思われた。質問や懇親会の席でも直接話しが普通にできれば、と思う。

５．お気に入りの写真（添付）

レンタルバイクがあること大変快適に過ごすことができました。